

演習 1 : 事例

【演習を始める前に】

この演習は、虐待通報を受理し、ある程度の情報は収集できている前提で、ケース会議を開催する段階（ケース会議において取り上げたいテーマ、持っておきたい視点、さらに収集が必要と思われる情報などを整理する段階）であることを前提としてください

（登場人物）

Aさん

19歳の男性。中度知的障害（IQ 50）、行動障害を伴う自閉症の診断あり。（行動援護対象）2語文程度であれば言語コミュニケーションも可能。両親、姉（姉）と同居。地元の特別支援学校を卒業後、××市内の「C」という通所事業所（就労継続B型）へ通所している。それ以外の福祉サービスは利用していない。両親からの虐待が疑われる。身長 155 センチ、体重 50 キロで男性としては小柄。

姉

23歳の大学生。交際中の男性がおり、自宅へ招くか思案している。虐待通報者。基本的にAさんには不干渉だが、家庭での状況が目には余るとの理由で××市役所へ通報。

父

50歳。肩書きは会社員とのことだが、いわゆる反社会的組織にも関係がある模様。非常に威圧的な態度を取る。現在、Aさんへ直接的な暴力を振るうことはないが、声かけは乱暴。以前はAさんのパニックを力で抑えようとしたり、パニックを止められない母へ暴力を振るったりしたこともある。仕事の関係で、平日が休みのこともある反面、土日でも家にいないことが多い。

母

49歳。専業主婦。大柄な女性。Aさんに対してはできる限りのことをしているが、Aさんの行動を抑えるために耳をつねるなどしており、これが直接の通報要因。韓流スターのコンサートや舞台鑑賞が趣味であり、気分転換・息抜きとなっているが、父の勤務の関係もあり、なかなか行くことができない。

B事業所

Aさんが利用する就労継続B型事業所。Aさんは月曜日から金曜日まで利用。事業所での支援は適切で特に問題ない。

××市

人口 10 万人程度の内陸地に位置する自治体。町村が合併して市となったこともあり、域内の資源は不十分。短期入所や行動援護、日中一時支援は域内に実施事業所がなく、短期入所は原則として緊急一時利用のみ認めている。障害者虐待防止センターは直営。計画相談支援事業所の整備も遅れており、Aさんはサービス等利用計画を作成していない。

(これまでの経過)

8月26日(月)

18時過ぎに姉から××市役所へ電話。弟のAさんが両親から虐待されているのではないか・・とのこと。身内ということもあり、かなり細かい情報まで得ることができた。

- 居所は自宅で両親、姉と同居。4人家族で、それぞれの状況は前ページのとおり。
- 福祉サービスは「B事業所」のみ利用。土日は家で過ごすか、両親が出かける場合は一緒に行動している。
- 経済状況は苦しくないが、父は明らかに何らかの反社会的な仕事をしていると思われる。良く乱暴な口調で電話している。
- 虐待と思われる事案については、次のとおり。
 - ・ 両親とも決して暴力的に手出ししているわけではない
 - ・ ただ、父が乱暴な声かけをするとAさんがパニックを起こし、大きな声を上げたり、手近なものを投げたりする
 - ・ 母はそれを止めるためにAさんの耳をつねる。思い切りつねっているわけではない。それが合図になっているのか、Aさんは「大声出しません」「物は投げません」と言いながらおとなしくなる
 - ・ ただ、月に1回くらいはそれでも収まらないことがあり、そうなると母は耳を思い切りつねったり、後ろから羽交い絞めにしたりして、おとなしくなるまで止めない。Aさんも「痛いです!」と声を上げるので、おそらく近所にも聞こえていると思う。
- これらの状況について、姉の自分からも何度か両親に何とかするように話したが、父は「自閉症なのだからこれくらいは普通だろう」、母は「昔からこうやってきたし、殴って言うことを聞かせているわけじゃない」という返答だった。
- ただ、母からは「まあ、行きたかったコンサートに行けなかったときは、確かにちょっとイライラしていたかもね」と反省の様子も見えた。

- 自分（姉）としては、できることなら協力する気持ちはある。携帯電話の番号を教えるので、必要があれば連絡してもらって構わない。

8月27日（火）

××市では、通報を受けてすぐに管理職を交えて「コア会議」を開き、緊急一時保護は要しないものの、看過できない状況であるとの結論に達し、できるだけだけの情報を収集した上で「ケース会議」を開催することとした。

8月28日（水）

コア会議の結論を受けて、担当者2名が情報収集へ出向いた。

B事業所では、サービス管理責任者から次の情報を得た。

- 事業所の車両で送迎しており、母とは毎日顔を合わせるが、Aさんが母を怖がっている様子はない。
- 父とは面識がないが、以前に職員が自宅へ電話した際、ドスの利いた声で「何の用だ？」と言われたことがある。
- 半年に1回の利用者家族会で、母から「こういう子（Aさん）がいるから仕方ないけど、コンサート1つ満足に見に行けないのはねえ・・・」という声を聞いたことがある。
- Aさんは事業所内でもパニックになってしまうことがあるが、その際に自分で耳をつねる仕草を見せる。自分なりに落ち着くための工夫なのかも知れない。
- 事業所としても、できることは協力したい。

続いて、B事業所を利用中のAさんから直接話を聞くことにした。虐待のことを直接的に聞くことはできないため、Aさんが理解できるように配慮しつつ、家族のことを聞いた。

- 母はいつも優しい。ときどき怒る。
- 父はいつも怒っている。でも良く外へ連れてってくれる。
- 姉も優しい。いっしょに遊んでくれる。
- 家は楽しい。B事業所も楽しい。お仕事を頑張ります。
- ずっと家で暮らしたい。

さらに、事前に電話連絡した上でAさんの自宅を訪問しようとしたところ、父が電話に出て、用向きを説明する間もなく「何の用だ」「何でわざわざ家まで来

るのか」「こんな不愉快なマネをして誰が責任を取るのか」「家に踏み込むってことは、それなりの覚悟で来るんだろうな」など、非常に威圧的な態度で訪問を拒否した。

やむなく、当該地区を担当する民生委員へ連絡して情報を得ていないか確認したところ、次の情報を得た。

- 近所の人からの話では、時折Aさんと思われる男性の叫び声が聞こえるときがある
- ただ、近所の人にはAさんが自閉症でパニックになることも知っているため、気にするほどのことでもない様子だった
- 民生委員が年に1回程度は定期訪問しているが、これまで拒否されたことはなく、父も同席して「小さかったころ、自分も民生委員さんへ世話になった。Aのこともよろしく頼む」と言われた
- 民生委員として協力できることがあれば、声をかけて欲しい。

8月29日（木）

これまでの情報を持ち寄って、「ケース会議」の開催に向けた庁内の打ち合わせを開くこととなった。

それでは、まず別添各様式の上段部分へ事例を読んでみて
の印象を書いてみましょう